

根性というものを自力のほ  
 からの、自力の執心といっ  
 て、人間の一番苦しみの元  
 迷いの元だ」と聞いて、ま  
 た話しておりながらも、自  
 分自身それをやっておつた  
 じゃないか。なんという恥  
 ずかしい私であったことが。

その瞬間、おばあちゃんを  
 憎む心がふつと消えて、あ  
 ますまなんだ、心の中で頭  
 をさげている私に帰らさせ  
 てもらった、ということだ  
 した。

**南無阿弥陀仏とは**

自分がいつでも正しい、  
 お前が悪いと人ばかり責め  
 めていた私の根性、また今  
 日もやった、そのことに気  
 づかされて、ああ愚かな私  
 でありましたと頭が下がる、  
 これが南無阿弥陀仏の「南  
 無」ということ、そこに本  
 当の人間の生き方に帰らせ

ていただけ、これを「阿  
 弥陀仏」という。南無阿弥  
 陀は、本当の人間のありよ  
 うに帰ろうではないかとい  
 う、仏の呼びかけの言葉な  
 んですよ、毎回体験を通  
 しながらお話を聞かせい  
 たいたきました。

—これは今日の私たちに  
 一番欠けている、根本的な  
 点だ。私はとんでもない思  
 い違いをしておつた—とい  
 うことから、私は仏法とい  
 うものに五十年、真向きに  
 向き合っていました。

**正義は負ける**

それで、正義は負ける  
 というこの題、分りにくい  
 ですね。どうして正義は負  
 けなければいけないのとい  
 うことがあります。この言  
 葉は金子大榮先生がおつし  
 やった、『今なぜ親鸞か』亀

井鑛著・樹心社)に出てお

りますので、ちよつと読ん  
 でみましょう。(以下引用)  
 浜松市の郊外、遠州灘の  
 海辺に面した大須賀とい  
 町のお医者で、永尾雄二郎  
 さんという方がおられます。  
 学生時代から仏法を学んで  
 いらつしやう。とりわけ  
 京都の金子大榮先生にすつ  
 と親しく教えをいただいた  
 おられました。

ある休診日の夜、表戸を  
 ドンドンたたくので出てみ  
 ると、四十年配のサラリー  
 マン風の男性が、近くの料  
 理屋で酒を飲んでいて気分  
 が悪くなり、この医院を  
 教わつてきた、という。休  
 診日だけれど、応急処置だ  
 けでもと頼まれ、強心剤の  
 注射をしてあげたら、「おか  
 げで気分がよくなった」と  
 車で帰宅された、といいま  
 す。

一月くらい経つて、突然  
 家庭裁判所から呼び出し状



公開講演会の様子。満堂の参詣者

しろうと判断による誤解だ  
 から、却下してやつて」と  
 いうと、そういう言い分は  
 法廷で述べなさいと、いそ  
 がしい中、何度も裁判所へ  
 通わされたそうです。裁判  
 所では、「相手はお金で解決  
 といっているし、お医者  
 金持ちだから、お金で解決  
 するのが一番」と、しきり  
 にすすめる。弁護士に相談  
 したら、「これは絶対に勝て  
 る。近頃は、こういう職業  
 的な弱味につけ込んで、い  
 ろいろ理由をつけて、取れ  
 るものは取らなきゃ損とい  
 った風潮が目にする。今回  
 の場合がそうだとはいえな  
 いけれど、社会正義の立場  
 からも、断乎拒否しなさい」  
 といった成り行きで、永尾  
 さんも、びた一文も払わな  
 いという肚を決めた、とい  
 います。

ところがこの話が金子大  
 榮先生の耳にまで届いた。

がきた。開くと、その休診  
 日に来たサラリーマンが帰  
 宅して、「あそこのお医者で  
 処置してもらったら治った」  
 と、自分の部屋へ入ったき  
 り出てこないの、家人が  
 見に行ったら、部屋で亡く

なっていたという。これは  
 その時の注射のせいに違  
 ないと、損害賠償とか慰謝  
 料を請求する裁判だとい  
 んです。先生は、「そんな  
 強心剤の注射で死ぬなんて  
 こと、医者の間なら問題外。